

ラフト……自然を抱擁し懷從して、永遠の生命を獲たとて、光と力が無つたならば、濁々と流れて止まぬ、川水で有ります。崇高なる人格者には、光と力を、自然が捧げるものである、崇高なる人格者たらんには、崇高なる人格者に、同化せざる可からず。所謂感性より悟性へ、不純より純へ、不信より信へ、入つた時に、始めて獲得する事が出来る、唯一絶待の、人格で有る。此の正しき信を得るならば、其處に絶大の感化力を得、其の体宇宙に遍く、其の徳宇宙に充ち生無く滅なく、常住永遠の生命を、見出す事が、出来るので有ります此の偉大なる人格者は抑も誰ぞや、奔濤激流岩を嚙んで、流る、富士川の水な上、此處身延栖神の靈碕に在す、日蓮大聖人其の人で有ります。

日蓮上人曰く、「日本國の有無は日蓮に依りて定まるなり」と、大獅子吼せられたる、大抱負と大慈悲とは、有史以來未だ且つて、有らざる事有ります。

富士川の水が流れて、大平洋となり、大平洋の

海の水はロンドン、ティムス河の水に、接觸してゐる限り、日蓮の靈光、否な日蓮上人不朽の生命は、世界人類の血液と流れ、萬有の上に、恩寵と、光榮とを、並與して止まぬものと、信するので有る。

萬場の諸君!!我等には、崇高なる人格者と、爲り得らる、素質が有ります。乞願くば、緊禪一番國の爲め、人類の爲に、靈界の偉人、日蓮大聖人を知り給へ。

以上

學問の軌範

高山 惠 忍

世の中に學問ほど有益な且遠大なものはない。座して宇宙萬物の真相を知り千萬年後に生れて千萬年の前を如り又千萬年後をも推究することが出来る、これ皆學問の徳である、故に吾々が世に處して行くに是非ともなくてはならぬものである、世

の學問する人を見るに其天職に依つて種々目的は異なつてゐるが吾々宗教家殊に日蓮門下の立場よりすれば言ふまでもなく國家人類を救はん爲に學問してゐるのである、さすれば吾々の學問は犠牲的であり、献身的であつて其間毫も私慾の念慮を挿むことを許さぬのである自分は衆生を度すべき僧の身なれば他の幸福を増す爲には自分の犠牲を忍ばねばならぬ。七百年の昔日蓮大上人は御一代を通じての忍難生活に依つて垂示せられたのである、其の末流を汲む吾々は犠牲的、献身的精神を以て勉學の軌範とするのは必然的要項である吾々が其意を体しこの決心のもとに成學したなら、それは光輝ある學問となつて世を益すること甚大であらう、此種の學者は眞に國家の寶として敬虔の念を以て優遇されるであらう、然るに事實はこれに反し一度其成果の微弱なるを見て余は駭驚せざるを得ない。

余は茲に於て從來學徒の誤り來りし一大缺陷を認めざるを得ない、一大缺陷とは何んであるか即

ち「信」の一字である、吾々が學問するのは智慧を得んが爲である眞の智慧は眞の信仰に依つて始めて發生するものである、聖祖は「諸佛の智慧を買ふは信の一字なり」又は「行學は信より起る」と教へられてある即ち智慧の根底となるものが信仰そのものである古語に所謂桃の秦々たる葉を生じ灼々たる花を開き莢々たる實を結ぶとあるのは唯この根養あるが爲である、智慧の働きはその花である、智慧の作用に依つて結果したる所は其の實である、さすれば眞の智慧は眞の信仰の根養に俟たねば到底開發することが出来ない信なくたゞ學のみ勝れたるは一個の單調な物知りとして見るべく到底宗教家の價値を有せぬものである、宗教家たるものは須らく深刻なる信仰より發する所の大智を以て宇宙に存在する萬物を觀察し之れを靈活せしめるだけの徳用を有せねばならぬ、近時文明の發達につれて泰西諸國の宗教が雜然として流傳し恰も蘭菊美を競ふが如くである、この際此の多岐多端の宗教に對つて破邪顯正の利刀を揮ふ吾

々は絶對必然的に深刻なる信仰より發す所の鮮明なる 智を保有せねばならぬ。

なんとなれば信なき淺薄なる智識を以て何んとして幽玄深妙なる宗教の本質を會得し得べしや、況や其除劣得勝おやである、探究に探究を重ねてしかも其一部でも窺ひ知ることを能はずして終に絶望の歎聲をもらすものは何れに基因するか、大に猛省しなければならぬ、吾人は宗教の本質を知らんとして汲々たる無信の學徒に對し木に依つて魚を求むるの言を呈したい、自覺せよ、江湖の學徒眞宗教の究竟を把握し破邪顯正の快腕を味わんとなら須く、圓滿なる智情意に根底する所の深刻なる信仰の獲得に向つて勇猛邁進すること最も急務なりとす、以上の如き信仰を學問の軌範とし成學を遂げんか、其學問は實に貴重な光輝ある活力ある働きとなつて社會を益し人類に幸福を與へること甚大なりと信ず、信仰確立すれば智識の散慢もな、勉學の中途にして遊惰放蕩に墮することもないのである、従つて惡思潮に惑溺することもな

く泰然として東西文明を批判し斷乎として全宗教の歸趨を指示することが出來、始めて眞の宗教家たるの資格を誇るべきであると思ふ吾人は深く思ふ所あつて敢て學徒に此事を勸む。

聖誕の警鐘は鳴る

德 光 泰 良

時は北條氏畏れ多くも三上皇を三處に配流し奉り。皇國の神政を恣にせし吾國開關以來破天荒の大逆罪を犯し愚民爲めに其據る處に迷ひ夜打、強盜を是れ事とし、加ふるに善神此の國土を去りて天變、地妖、飢饉、疫癘交々來襲し其慘憺たるや實に鮮血滾々として流れて河を成し、死屍累々として積んで山を成し苦痛叫喚實に現世の地獄にあらずして何んぞ噫、是れ畢竟、北條氏の潜越、惡政に據ると雖ども斯く世法の混亂せしは當時の佛法及び僧侶の如何に誤り居りしか、如何に腐敗墮落せしか彼等僧徒の邪教は浮薄なる人心に流れ社